

「なんて」と「なんか」の分析

A Study on nante and nanka

方 韻
香港中文大学

要旨

日本語における「なんて」と「なんか」は、言い換えが可能な場合と、不可能な場合がそれぞれある。例えば、例示などを表す場合、そのいずれも使えるが、原因不明の気持ちを表す「なんかおかしい」のような場合は、「なんて」による言い換えが難しい。一方、「帰国するなんて、ぜったいありえない」のような場合は、「なんか」に言い換えられない。本稿では、上記のようにみられる「なんて」と「なんか」の使い分けについて分析する。

キーワード:

なんて、なんか、言い換え、互換性、非互換性

「なんて」と「なんか」の分析

方 韻
香港中文大学

1はじめに

教育の現場では、「なんて」と「なんか」の使い分けが分からなくて戸惑っている学習者が見られる。実際、その両形式は、本来の意味が少し違うが、音が似ている上、どちらも軽視などの意味を持っているため、混同されやすい。本稿では、その両形式間にみられる使い分けについて分析を試みる。

2 「なんて」の用法の整理

2.1 引用を表す

「なんて」は、もともと「など(副助詞「など」+格助詞「と」)」から変化してきたものである。このため、引用を表す「〜と」の機能が場合によっては働くことがある。次の例である。

- (1) 電子レンジ買う奴はバカだ、なんて言ったんですよ。(『夫婦』p.32)
- (2) その本には、「使っている人はあまりいないかも」なんて書いてあるけれど、いた！ここに、ちゃんと。(『若者』p.30)

(1)と(2)における「なんて」は、いずれも「と」または「などと」に言い換えられるため、内容の引用という機能が生きているケースになる。

2.2 例示を表す

「なんて」は、「〜など」の口語形という点で、基本的に、相手や対象を軽く見たり、自分を謙遜するような感情を表すときに使うが、場合によっては、次のように一例をあげるという用法もみられる。

- (3) 俺は銀行のポンコツコンピュータなんて信じないよ。(『天国』p.140)
- (4) 地位や財産なんて、いらないよ。ほしいのは君の愛だけだ。(『ノート』p.164)

(3)と(4)における「なんて」は、意味的に例示の「など」に似ている。両文では、軽視などの気持ちがいくらか含まれるが、一例を示すような意味合いも捉えられるということがいえる。ただ、(3)にもみられるように、「なんて」の前に出る事柄を例として示すことによって、別にそれ以外のものがないというニュアンスがあるので、その提示を避けた言い方だという解釈も成り立つだろう。

2.3 主題を表す

引用のほかに、「なんて」には主題を取り立てる使い方もある。この場合は、取り立ての「～は」の機能にかなり似ているところがあると思われる。次がその例にあたる。

(5) 支店長がのこのこやってくるなんて、ふつうじゃないぞ。(『天国』p.133)

(6) 知事なんてだいたい資本家の犬みたいなものだ。(『海辺』p.402)

(5)と(6)の「なんて」は、文中において主題提示的機能を果たしている。それぞれ、「(やってくる)というのは」と「は」のように言い換えても、同じような意味合いを表すと考えられる。

2.4 予想外の感情を表す

「なんて」は、また話者の意外な気持ちを表すことができる。この場合、「～とは」にとつかわることが多い。

(7) この野郎、人に向かって「バカ！」だなんて何だ！(『類義』p.55)

(8) あなたにそんなことを言うなんて、実にひどい男だ。(『文型』p.542)

(7)と(8)の「なんて」は、話者の怒りなどの気持ちを強く言い表す例となる。この場合、驚きなどを表す「～とは」に言い換えても意味上の変わりがないと思われる。

3 「なんか」の用法の整理

3.1 不定の物事を表す

「なんか」は、「なにか」(代名詞「なに」+副助詞「か」)が変化した形式である。このため、物事の不確かという意味機能をまだ維持することがある。次はその例である。

(9) 「なんか言った。」「言やしないよ。」(『雪国』p.85)

(10) 東京になんかあてがあるの？(『雪国』p.117)

(9)と(10)からわかるように、「なんか」は、ある事柄に対して「はっきりいえないが、なにかがあるだろう」というような意味合いを示している。この場合、基本的に「なにか」にある不定の意味をそのまま表す。

3.2 例示を表す

「なんか」は、また「～など」の話し言葉になる場合があるが、「～など」に込められる例示のような用法が見受けられる。次のような例である。

(11) そんな洪水の風景をニュースなんかで見るたびに君は思う。(『海辺』p.22)

(12) あと「アルツ」(アルツハイマー病のこと)。「アルツ入ってね？」とかなんか。(『若者』p.193)

(11)と(12)における「なんか」は、不定などを表す言い方ではなく、もっぱら軽い例示が生かされる用法となる。

3.3 主題を表す

「なんか」には、主題を婉曲的に表現する使い方があある。次の例である。

(13)うちの女房なんか、もう愛情をこめてませんからね。(『夫婦』p.32)

(14)この役なんか、まさに宮沢りえにぴったりだ。(『ノート』p.163)

この場合、「なんか」は、「など」の例示的意味合いが薄れ、主題の提示をやや曖昧にぼかし、それを婉曲的に表す言い方になっている。

3.4 理由や原因が不明の感情を表す

「なんか」には、「どうしてなのかよくは判然としないのだが…」という理由や原因などが分からないある感情を表す用法がある。次の例である。

(15)この道を歩くとね、なんかうれしくなるのよね。昔の記憶のせいかな。(『類義』p.59)

(16)なんか、最近カレンが超エゴくてさ～(『渋谷』p.16)

(15)と(16)のように、文頭または文中に使われる「なんか」は、原因や理由などが不確かなある種の感情や情緒を表すことができる。特に、(16)のように、「なんか」は、日本の若者たちの言語表現に頻用され、前置き言葉や間投詞として使われることもある。

4 「なんて」と「なんか」の互換性

これまでのところからわかるように、「なんて」も「なんか」も、「例示を表す」用法と「主題を表す」用法をもっている。実際、この2つの用法において、その両形式の間に確かに一定の互換性がみられる。

4.1 例示を表す場合

前掲の用例から例示を表すものを探してみると、(3)、(4)、(12)では、「なんて」と「なんか」の互換性が許され、どれを使っても意味的には特に大差がないと考えてよさそう。そして、その3例は、「名詞+なんて」または「助詞+なんか」の形であるということもわかってきた。これと対照的なのは、(11)の「なんか」が「なんて」への言い換え不能だということである。(11)とほかの諸例を見比べると、「なんか+助詞」の形をとる点では、違いが生じている。ということは、「なんか」は、名詞か助詞の後に置かれるときに、「なんて」との言い換えが可能であるが、助詞の前に置かれるときには、それができないという相違がみられる。したがって、一口に「なんて」と「なんか」は互換性があるとはいうものの、使用条件がやや異なれば、言い換えができなくなることもある。

4.2 主題を表す場合

主題を表す用例の中では、(6)、(13)、(14)において、「なんて」と「なんか」が互いに言い換えられても意味的には別に違いがないと思われる。さらにその3例にしぼってみると、そのいずれも名詞が前接だという共通点が見受

けられる。ということは、「名詞+なんて(なんか)」が現れた場合、その両者は基本的に言い換えが可能だということがいえる。裏返してみれば、同じく主題を表す(5)は、「名詞+なんて(なんか)」というタイプではないため、その中の「なんて」が「なんか」に置き換えられないのである。

また、主題を表す場合では、「なんて」と「なんか」の間に互換性があるものの、その表現機能の違いがないわけではないようである。泉原省二(2007)は、それについて簡単な表をまとめているが、その一部を次のように引用し、参考されたい。

「なんて」と「なんか」の機能差

	なんて	なんか
文体	話し言葉	くだけた話し言葉
感情	やや強い	強い

このように、主題を表す条件下では、「なんか」は、「なんて」に比べ、強いくだけた話し言葉の色合いが感じられる。よって、日常使用の際にその微妙なニュアンスの差に留意する必要があるわけである。

5「なんて」と「なんか」の非互換性

4で「なんて」と「なんか」における非互換性には少し触れたが、そのほかのケースも見逃せない。以下、それらを取り上げよう。

5.1「なんて」のみが使用可能な場合

「なんて」の用法には、引用と予想外の感情を表すものがあるが、この2つの用法は「なんて」のみが使用可能だと考えられる。

5.1.1 引用の「なんて」

前述したように、「なんて」は、いわゆる「など+と」から変化したものであるため、もとより引用の機能をもっている。これに対して、「なんか」は、「なにか」から変化したもので、内容の引用に用いられれば、「なんかと(言う)」のような形で言い表さなければならないし、しかもその前が句または語単位であるという制限があると思われる。よって、例えば、(1)や(2)または下例のような場合では、「なんて」の使用が可能なのにひきかえ、「なんか」は使えないのである。

(17) (三十万なんて金は——)と、城所安男は胸の中で呪文のように呟いた。(『天国』p.8)

日本語には、前掲用例(9)の「なんか言った」のように「なんか」が「言う」などと一緒に使われることがあるが、それ

方 韻:「なんて」と「なんか」の分析

は明らかに内容の引用などではなく、「言う」という動作の向ける不定の事柄を示す言い方になる。つまり、「なにかのことを言った」という意味合いを表すことになるのである。これは、用例の(1)と(2)とは性格が根本的に異なることを物語っている。したがって、引用を表し得るのが「なんて」であり、「なんか」ではないため、その両形式は、互いに言い換えられない。

5.1.2 予想外の「なんて」

「など+と」から変化した「なんて」であるが、それには「～と」や「～というのは」のみならず、「～とは」の意味合いも含まれる。この中で、「～とは」は主題のほかにも、話者の驚きなど情緒的なことも表し得る。これにつながっている「なんて」も、用例(7)、(8)のように驚きなどを表すことができる。さらに、「～とは」だけで文を言い切るような言い方は、「なんて」にも見つかる。次の例である。

(18) 彼女がそんなことを言うなんて (『教育』p.407)

このように、「なんて」は、「～とは」と同じく話者の驚きなどを示すことができる。これに対して、「なんか」は、あくまで「なにか」と「～など」の意味合いを表すのみで、「～とは」に含まれる主題の提示ということを表すことができるが、その情緒的用法とは相容れるものではない。したがって、「なんか」は、予想外の「なんて」に言い換えられないのである。

5.2 「なんか」のみが使用可能な場合

「なんか」の用法には、不定の事柄と原因不明の感情を表すものがあるが、これらは、基本的に「なんか」のみが使用可能になる。

5.2.1 不定の「なんか」

「なにか」の用法には、物事の不確定を表すものがある。そこから変形した「なんか」もそういう意味機能を維持している。よって、用例の(9)と(10)では、「なんか」の使用が可能になるのである。

先のところにも述べてあるように、「なんて」は「など+と」につながる言い方で、「なにか」にみられる物事の不確定という意味要素との接点がないように思われる。こういう意味機能自体からくる根本的な異同があるため、物事の不定などを表す場合では、「なんか」は、「なんて」に言い換えられない。

5.2.2 感情の「なんか」

日本語では、原因不明のある気持ちが「なんか」によって表現される。この「なんか」の用法は、ある意味では、前述している不定の意味合いの一種延長的用法として考えてもよからう。違うのは、物事であるか感情であるかというところにあると思われる。「なんか」にあるその原因不明の感情表現は、用例(16)のように、ときに話題導入の前置き言葉的な機能を果たすために用いられることがある。このような「なんか」は、また話題をぼかすような表現効果も含

むため、日本の若者たちに格段に愛用されているようである²。

しかし、「なんか」にみられるそういう原因不明の感情的表現機能は、「なんて」には備わっていない。例示などの「～など」や引用などの「～と」の機能しかもっていないためである。よって、原因不明の感情を表現する「なんか」は、「なんて」には言い換えられない。

5.3 慣用的表現などの場合

5.1と5.2のほかにも、以下のような場合も、両者の互換性が許されない。

5.3.1 「なんか+は、が、の、を、に、で、と、から、へ……」の形

前述したとおり、名詞に後接する場合は、「なんて」と「なんか」の間に互換性がある。しかし、たとえ名詞の後ろであっても、名詞と助詞「～は、が、の、を、に、で、と、から、へ……」³が同時に現れている場合では、その間には、「なんか」を差し込んでかまわないが、「なんて」は基本的に割り込めない。用例(11)以外に、次の例も見つかっている。

(19)とにかく、駅なんかに迎えになんて来られてたら、本当に大変よ。

(『夫婦』p.14)

(20)私は自分をいいおとこだと信じていたので、女中部屋なんかへ行って、兄弟中で誰が一番いいおとこだろう、とそれとなく聞くことがあった。

(『晩年』p.32)

(20)はともあれ、(19)における「なんか」と「なんて」の使い方が対照的である。「駅なんかに」の「なんか」は、基本的に「なんて」に言い換えられないが、「迎えになんて」の「なんて」は、「なんか」に言い換えても意味が通じるだろうと思われる。

このような言い方について、泉原省二(2007)は、「名詞+なんか」が前の名詞と合体し、一つの名詞を構成する形になっているのに対して、前の名詞と合体しない「名詞+なんて」は、名詞だけではなく、自分のまえにくるすべての物事を「」でくくって、引用することに機能を発揮しているからであると分析している。

総じて言えば、「なんか」は、「なんて」に比べ、使用範囲が広く、助詞の前後のどちらに置かれても通用するが、「なんて」は使用範囲がやや狭く、一般に助詞の後ろにしか置かれないという使用上の違いが明らかになっている。

5.3.2 「か／やなんか」の形

上にも助詞の後に「なんか」も「なんて」も使えると言っているが、しかし例示を表す時の「かなんか」や「やなんか」など慣用的表現形式には、「なんて」は普通使えない。例をあげると、次のようになる。

(21)今度の休みは映画かなんか行かない? (『文型』p.538)

(22)本当は近所に駄菓子やなんか無く駄菓子屋にパフェも無いし免許もないが、夢だ

方 韻:「なんて」と「なんか」の分析

から気にしない。(sony)

「か／やなんか」の言い方について、先の泉原省二(2007)の観点から考えれば、名詞化できる機能が「なんか」にあり、「なんて」にはないため、その両者の互換性が許されないと結論付けるだろう。

6 むすび

本稿では、日本語の類義的表現「なんて」と「なんか」の使い分けについて、主に互換性のあるなしの面から検討してみた。全体的にみれば、両形式は、いずれも「～など」の意味合いを表し得るため、例示や主題の提示において、一定の互換性がみられる。しかし、「なんて」は、「などと」の意味機能などももっているため、内容の引用や予想外のことを表すことができる。これと対照的に、「なんか」のほうは、「なににか」の意味機能をもっているため、不定の物事や原因不明の感情を表すことができる。こういうところで、両形式における最も大きな違いがみられると本稿で指摘している。

しかし、本稿では、まだ研究しきれないところが多い。例えば、慣用的言い方と思われる「動詞+たり+なんか+する」の形式は、泉原省二(2007)が「なんて」にとってかわらないと指摘しているほか、小川芳男ほか(1987)とグループ・ジヤマシイ(2001)でも、みな「なんか」の用法としてまとめられている。しかし、インターネットで検索したところ、「動詞+たり+なんて+する」の用例が随所に発見できる。また、「なんて+は、が、の、を、に」などの言い方は、確かにめったにみられないが、その逸脱現象として、例えば「なんてに」とか「なんてへ」のようなケースがたまにみつかるときもある。これらの現象についてどう分析したらよいのかは、今後の研究で考える必要があると思う。

注

- 1 本稿では、「なんてかわいいんだろう」、「なんてことない」のような言い方を分析外とする。
- 2 これは、『渋谷語事典 2008』や『若者言葉に耳をすませば』などに出ている若者たちの発話や会話例を読んで判断した。確証するには更なる検証が必要であろう。
- 3 ここであげている「の」は、形式体言の「の」を除くものを指す。

用例出典

村上春樹(2006)『海辺のカフカ(上)』東京:新潮社、
渋谷語制作委員会(2008)『渋谷語事典 2008』東京:トランスワールドジャパン
浅田次郎(2000)『天国までの百マイル』東京:朝日新聞社
太宰治(1990)『晩年』(改版 35 版) 東京:角川書店
曾野綾子(1983)『夫婦の情景』東京:新潮社
川端康成(1973)『雪国』東京:新潮社
山口仲美(2007)『若者言葉に耳をすませば』東京:講談社

www.sonymusic.co.jp/Music/Info/seemass/diary/main-200505.html (2009.10.3.アクセス)

参考文献

泉原省二(2007)『日本語類義表現使い分け辞典』東京:研究社

大阪YWCA日本語教師会・岡本牧子(ほか)(2000)『…くらべてわかる…日本語表現文型ノート』大阪YWCA日本語教師会

小川芳男・林大(ほか)(1987)『日本語教育事典 縮刷版』東京:大修館書店

グループ・ジャマシイ(編)、徐一平(代表)訳(2001)『日本語文型辞典 中国語訳』東京:くろしお出版